

高知市方言における準体句の歴史的変化

高知大学大学院 齋藤香織^{さいとうかおり}

1. 問題の所在と本発表の目的

準体句とは狭義的には古典語の連体形準体法によって構成される名詞句¹を指し、その準体句を形成する機能を持つ助詞を準体助詞と呼ぶ。諸方言には、古典語と同様に連体形が名詞句を構成する方言もあれば、ノ以外の準体助詞で準体句を構成する方言もある。『方言文法全国地図』(以下 GAJ) 第 16 図「(ここ) に有る [のは]」を例に挙げると、富山県・石川県のほぼ全域、高知県の北部を除く全域、新潟県 (旧能生町・旧安塚町)、長野県 (小谷村)、愛媛県 (西宇和郡) では、質問文の準体助詞ノにあたる部分にガが回答されている。

中央語では、準体助詞ノが中世末期・近世初期の文献から現れはじめ、近世末期頃に定着した (吉川 1950, 坂井 2015; 2019a ほか)。準体句におけるノの定着は、形状タイプが事柄タイプに先行する (坂井 2015; 2019a)。また、準体句へのノの定着に伴い、述部や接続部にもノが現れはじめ、現在のノ (ダ) 文のようにノの表示が義務的になった表現もあれば、ダロウ/ノダロウのようにノを使用しない形式と併用される表現もある (青木 2016: 6 章, 佐藤 2009; 2011, 鶴橋 2013: 3, 5, 6 章)。

本発表で対象とする高知市周辺²方言 (以下、高知市方言) では、ガ・ノ 2 種類の準体助詞が用いられている。このうちガは、述部や接続部での使用を含め共通語の準体助詞ノに相当する用法をもつ (上野 1993)。中央語の準体助詞ノの定着過程については多くの先行研究があり、現代共通語におけるノの意味機能の研究も盛んである。しかし、高知県方言のガについては、近世後期に既に準体句を構成していた (諸星 2004: 10 章, 彦坂 2006, 上野 2018) ことが指摘されているものの、その定着や発達に関する通時的研究はなされていない。

高知市方言は幕末期の口語資料が残されており、その用例からは当時、準体助詞が準体句へ定着しつつあった様子がうかがわれる。また、近現代の談話資料がまとまった量存在しているため、ガの準体助詞化以降の発達過程を確認できると考える。

以上の前提に基づき本発表では、中央語の準体句研究の枠組みを利用して調査を行い、高知市方言の準体句の史的変遷を中心に、以下 3 点を論じることを目的とする。

- ①高知市方言における準体助詞の発達・定着の過程
- ②中央語と高知市方言の準体句の変遷の共通点と相違点
- ③ノを含む複数の準体助詞を併用する方言の準体句の変遷の一例

2. 資料と分析方法

本発表では、現高知市出身の土佐藩士の口語が反映された書簡資料と、1890 年代以降に

¹ 「古典語において、活用語の連体形が名詞 (= 体言) に準ずる働きをすることがある。連体形のそのような働きを「準体法」と呼び、連体形準体法によって構成される名詞句を「準体句」と呼ぶ。」(「準体句」『日本語文法事典』(大修館書店, 青木博史執筆項))。

² 本発表では現いの町・現高知市・現南国市を指す。

生まれた話者による 7 種の談話資料³のうち高知市周辺地域で言語形成期を過ごしたとみられる話者の発話を対象とする。使用される形式の推移は話者生年を基準として集計する。

対象とするのは項位置のゼロ準体・ガ準体・ノ準体⁴と、準体助詞を含む述部・接続部表現である。準体助詞の現れ方・定着の過程は統語的位置によって異なる（信太 1970, 柳田 1993 ほか）ことが指摘されているため、本発表では柳田（1993）の枠組みを使用し、準体助詞をその現れる位置によって以下の 3 種類に分類して分析を行う。

- ①「項位置」の準体句…項の位置にある準体句で、文脈上、述語の格成分であると考えられるもの。坂井（2015）にならい、ヒト・モノを表す準体句を（1a）「形状タイプ」、コトを表す準体句を（1b）「事柄タイプ」と呼ぶ。

- (1) a. フトイガヂャッタラ ウント タカイケンド ホッソイガデ エーワヨ
〔妖怪のおもちゃの）大きいのだったら うんと 高いけれど 細いので いいわよ。〕
(形状タイプ (ガ準体)・録音 [高知市朝倉・女性・1894 年生] 0501611|K|)
b. ソノ カケゴエガ オモシロカッタ ガー ワスレタ オリバ オーカタヂャケド (略)
〔その かけ声が おもしろかったの [を] 忘れた 時が ほとんどだけれど (略)〕
(事柄タイプ (ガ準体)・ふるさと [高知市・女性・1907 年生] 高知_39_b_099)

- ②「述部」表現…述部を構成する表現で、準体句に由来すると考えられるもの。具体的には、現代共通語のノ（ダ）・ノ（カ）・ノダロウ・ノデハナイカの構成要素に対応する形態素からなる表現を対象とする。

- (2) オカングサマデ ホーサクオ ムカエマシタキニト ユーテ ムカエルガデャネー。
〔おかげさまで 豊作を 迎えましたからと 言って 迎えるのだねえ。〕
(ノ（ダ）相当 (ガ)・方談 (2) [南国市滝本・男性・1896 年生] 0223604|A|)

- ③「接続部」表現…従属節末を構成する表現で、準体句に由来すると考えられるもの。具体的には、現代共通語のノダカラ・ノデ・ノダケド・ノニ・ノナラの構成要素に対応する形態素からなる表現を対象とする⁵。

- (3) コジャント トジマリヨ シチョイテ ネヨト ユワレチューガデャキ
〔きちんと 戸締りを しておいて 寝よと 言われているのだから〕
(ノダカラ相当 (ガ)・方談 (2) [南国市白木谷・女性・1898 年生] 0218502|B|)

3. 項位置による準体助詞の定着

項位置の準体句の用例数を表 1 に示す⁶。中央語と同様に高知市方言でも、形状タイプ・

³ 稿末「使用資料」にまとめて掲載する。

⁴ 「ゼロ準体」は連体形による準体句、「ガ準体」は準体助詞ガによる準体句、「ノ準体」は準体助詞ノによる準体句を指す。ゼロ準体に対し、ガ準体・ノ準体のような準体助詞による準体句を「準体助詞準体」とする

⁵ 文末に上記 5 形式に相当する表現が現れた場合も、「接続部」形式として処理する。

⁶ 便宜上、話者生年を元号の周辺で区分を設けて考察する場合がある。1890～1920 年代を明治・大正期、1930～1970 年代を昭和期、1990 年代を平成期とした。() 内は用例のうち慣用表現とみられる用例数を表す。

事柄タイプともに、ゼロ準体から準体助詞準体へ移行したことがうかがえる。幕末期の資料では形状タイプの準体句の過半数がガ準体であったのに対し、事柄タイプでは1890年代以降生まれの話者でもゼロ準体が残存していることから、ゼロ準体から準体助詞準体への移行は形状タイプが先行し、事柄タイプがそれに続いたといえる⁷。この点は、江戸語・上方語・鹿児島方言・宮古語（坂井 2019a, 坂井 2015, 久保蘭 2022 予定, 坂井 2019b）の指摘に沿うものである。また、1890年代以降生まれの話者では形状タイプのゼロ準体の用例がみられないことから、ゼロ準体が形状タイプから許容されなくなったと考える。この結果も上記の4地域と同様であり、この現象が日本諸語において共通する可能性（坂井 2019b）を支持する一つの証拠となる。

表1 項位置の準体句

話者生年	形状タイプ				事柄タイプ			
	〇	ガ	ノ	計	〇	ガ	ノ	計
幕末	5	11	1	17	66(27)			66
明治 ~1899	10			10	8(1)	2		10
大正 1900~	7	2		9	7	2		9
1910~	5			5	4	1	1	6
1920~	4	24		28		2	4	6
昭和 1930~	1			1		1		1
1940~	6	5		11	1	1		2
1950~	2	1		3		2	5	7
1960~				7			4	4
1970~	2	6		8		3	10	13
平成 1990~			12	12			23	23

- (4) a. こち二ある〇ハ、つむぎのわた入と、ひとへものと、是ハ去年からある。
 (形状 (〇)・書簡 (1860 年代成立) [高知市仁井田・男性] 150 頁 11 行)
- b. たい、月日のうつり行〇がたのしみにて候。
 (事柄 (〇)・書簡 (1860 年代成立) [高知市仁井田・男性] 19 頁 14 行)
- (5) a. 一、びんつけ かたきガいよし。
 (形状 (ガ)・書簡 (1860 年代成立) [高知市仁井田・男性] 70 頁 14 行)
- b. アノ テニ アーン ガガ ノコッチョッテカラニ キキヨッタ モンヂャ。
 [あの 手に『負』けない のが 残っていてからに 聞いていた ものだ。]
 (形状 (ガ)・方談 (2) [南国市白木谷・女性・1898 年生] 0218110|B|)
- c. ワカイシガ クルガガ ユワユル ニンキトーヒョーノ アノ
 [わかいしが 来るのが いわゆる 人気投票の あの]
 (事柄 (ガ)・方談 (2) [南国市滝本・男性・1896 年生] 0217710|A|)

4. 節末における準体助詞の定着

現代共通語では、項位置以外に述部や接続部でも準体助詞ノが用いられる。4 節では高知市方言の述部・接続部での準体助詞の現れ方を確認する。

4.1 述部における準体助詞の定着

述部を構成する表現に準体助詞が含まれる用例の数を表 2 に示す。いずれの表現でも準体助詞ガ・ノが現れるが、ノ(ダ)・ノ(カ)のようなノ(ダ)文では準体助詞の下接が早く、ノダロウ・ノデハナイカはそれに遅れる。

ノ(ダ)(ガヤなど)・ノ(カ)(ガカナ

表2 述部を構成する準体助詞

話者生年	ノ(ダ)		ノ(カ)		ノダロウ		ノデハナイカ		計
	(φ)	ガ	ノ	ガ	ノ	ガ	ノ	ガ	
明治 ~1899	2	1		2	1				6
大正 1900~	1	1							2
1910~		1	1		1				3
1920~			6	1	1	2		2	12
昭和 1930~		1							1
1940~		3					1		4
1950~		7	2	10	2	12	1	3	37
1960~		3	11		15		1	1	34
1970~		2	8	8	22	14	3	1	68
平成 1990~		2	11	26	32	4	7		87

⁷ 事柄タイプのゼロ準体には、明治・大正生まれの話者にいたっても助詞ガ・ヲ・ハが後接している。

ど)は明治生まれの話者から準体助詞を含む用例を確認できる。ただし、1900 年代生まれの話者までは、ノ(ダ)に相当する意味合いの「用言句+ヂャ」もみられる。用言句に直接コピュラを下接する表現は、近世江戸語ではすでに珍しくなっていたが(信太 1970, 土屋 2009: 2 章)、高知市方言では江戸語に比べてやや遅くまで使用されていたようである。

(6) ムカシノ コトニヤ ソノ スミオ ラチンニ トウケタ~~〇~~ヂャ ンマデネ。

〔昔の ことには その 炭を 荷として つけたの~~だ~~ 馬でね。〕

(ノ(ダ) 相当(〇)・ふるさと [高知市・女性・1907 年生] 高知_39_b_099)

ノダロウに対応する表現(ガヤローなど)は、1920 年代生まれの話者から用例を確認できる。ただし、準体助詞が付かないロー(推量の助動詞)にも、(7)のように事情を推量していると考えられる例が存在する。そのため、高知市方言のロー/ガヤローにおける準体助詞ガは、あってもなくても構わないがあるときは必ず事情や実情を表す(青木 2016: 第 6 章)という状態であると考ええる。

(7) ネサゲシマシタッテ ダシチューネー ウレンナッタ~~ロ~~カネ

〔値下げしましたって 出しているね 売れなくなっただろうかね〕

(ノダロウ相当・安岡 2003[高知市?・女性・1950~70 年代生])

4.2 接続部における準体助詞の定着

接続部を構成する表現に準体助詞を含む用例の数を表 3 に示す。いずれの表現も共通語ではノが現れうる表現だが、高知市方言ではノダカラ・ノダケド・ノナラのように明治生まれの話者から準体助詞が現れる表現と、ノデ・ノニのように準体助詞が安定して現れない表現がある。

原因理由表現について、ノダカラ相当表現は明治生まれの話者からガを含む形(ガヤキなど)で現れる⁸。一方、同じ原因理由表現でも、ノデに対応する形式としての「ガデ」は確認できなかった⁹。

逆接条件について、ダケドにガ(・ノ)が上接する場合は、現代共通語と同様に「従属節の事態と主節の事態との矛盾・対立」(野田 1997: 170)の意味合いを表すが、ノニに対応する「ガニ」はほとんど見られず、〇ニ¹⁰・ノニで表すのが一般的であるようである¹¹。

表 3 接続部を構成する準体助詞

	ノダカラ		ノデ	ノダケド		ノニ		ノナラ				
話者生年	ガ	ノ	ノ	(〇)	ガ	ノ	(〇)	ガ	ノ	(〇)	ガ	計
幕末							5					5
明治	~1899	8			1		2		3	1	1	16
大正	1900~									1		1
	1910~	1					2					3
	1920~	2					3					5
昭和	1930~						1					1
	1940~	3					1					4
	1950~	5			3		1	1	1			11
	1960~		1		3		1		3			8
	1970~	4	1	8	3	5	1		2	1	4	29
平成	1990~		1	1	6	20			7			35

⁸ 現代共通語のノダカラと同様、P(前項)とQ(後項)との間に「Pである以上、当然、Q」(田野村 1990: 103)の意味が表されていると取れる例が多いことから、ノダロウと同様に準体助詞がある場合には「背後の事情」「実情」が表されると認識されていたと考える。

⁹ 西土佐方言(野間 2013)でも「ガデ」が使用されにくいという指摘がある。

¹⁰ 時代が下っても「〇ニ」が散見される点は、項位置の二格でゼロ準体が残存しやすいという中央語の傾向(原口 1978 ほか)と類似する。

¹¹ ただし、ガヂャノニ(ノダノニに対応)やガヤニ(ノダニに対応)用例もある。ガヤニに当たる表現は四万十市西土佐方言でも確認されており(野間 2013)、GAJ 第 40 図でも土佐清水市にガヤニの回答がみられる。

- (8) コーヒー ノミタイケド オユガ ナイガヨ オユガ アッタラ ノムニネー
 コーヒー [コーヒー 飲みたいけど お湯が ないのよ お湯が あったら 飲むのにね コーヒー]
 (ノニ相当 (ニ)・安岡 2003[高知市?・女性・1950~70 年代生])

原因理由表現・逆接条件表現内で準体助詞の定着に差が生じた背景としては、連体形の準体法が遅くまで保たれていたために、ノデ・ノニの元となる準体助詞準体+格助詞ニ・デ¹²の出現頻度が低かった可能性や、準体助詞の有無に関わらず (7) のように「背後の事情」「実情」をキ (カラ相当) やケンド (ダケド相当) で表現できていた可能性が考えられる。

ノナラに対応する仮定表現は、高知市方言ではニヤッタラ・ガヤッタラが担っている。なお、既に項位置やノ (ダ) 相当表現ではゼロ準体が許容されていないと考えられる 1970 年代生まれの話者のニヤッタラは、コピュラと接続助詞からなるヤッタラが、一つの接続助詞として再解釈されたものである可能性が考えられる。

- (9) タブン コピーッテ ヨンジューマイ ヤルニヤッタラ イチマイズツ イチマイ オシ
 テ ヤラントー [多分 コピーして 40 枚 やるニやったら 一枚ずつ 一枚 押して やらないと¹³]
 (ノダッタラ相当 (ニ)・安岡 2003[高知市・女性・1970 年代生])

5. 準体助詞ガとノの推移

最後に、以上に見た変化を、ガ・ノの 2 種類の準体助詞の推移という観点から考えたい。高知市方言では、項位置・述部・接続部のいずれの位置でもガが用いられるようになったのちにノが多数を占めるようになる。ただし、ガからノへの一方的な変化ではなく、ガからノへ置き換わった表現と、準体助詞を用いなかった部分にノが現れるようになった表現の 2 通りの道筋があったと考えられる。

また、昭和以降生まれの話者においてノが優勢になっているとはいえ、ガが用いられなくなったわけではない。この世代の話者では、項位置でガ準体を用いなくなる傾向がある¹⁴ものの、ノ (カ) 相当表現でガを多用するほか、ガッテ・ガチャ¹⁵などの半ば終助詞化した表現も使用している。つまり、ガは文末形式に偏って使用される傾向にあるといえる。

6. まとめと今後の課題

本発表では、高知市方言の準体句の史的変遷について以下の点を示した。

- ①高知市方言における準体助詞の発達・定着の過程 項位置では形状タイプが事柄タイプに先行して準体助詞が定着した。述部・接続部では、明治・大正生まれの話者から準体助詞が用いられていた表現がある一方、準体助詞が定着しなかった表現もある。
- ②中央語と高知市方言の準体句の変遷の共通点・相違点 項位置の準体助詞が形状タイプ

¹² 青木 (2016: 7 章) の、ノ準体+格助詞ニの構造変化により接続助詞ノニが発生したとする議論に基づく。ノデについてもノ準体+格助詞デから接続助詞化したとする議論がある (原口 1985)。

¹³ 安岡 (2003) の訳による。なお、「ニヤッタラ」は今回の談話資料に現れていないが、現在の高知市の 40 代以下でも使用が珍しくない表現である。

¹⁴ ただし、1990 年代生まれの話者によれば、項位置のガ準体も話者自身が普段から使用する表現であるという。

¹⁵ 調査範囲ではいずれも 1940 年代生まれの話者で初出。ただし、これらのガは準体助詞ではない可能性もある。

から事柄タイプの順に定着した点や、述部・接続部に準体助詞が現れる場合に「背後の事情」「実情」といった意味が表される点は共通している。しかし、述部・接続部において共通語でノが現れる位置に、高知市方言でも同様に準体助詞が現れるわけではない点は異なる。

- ③ノを含む複数の準体助詞を併用する方言の準体句の変遷の一例 準体助詞が用いられるようになる場合、いずれの位置でもガが先行し、その後ノが優勢になる。その過程では、ガがノに置き換わる場合と、ゼロ準体で表されていた部分にノが導入される場合があったとみられる。また、項位置ではノ、文末部ではガという使い分けが生じつつある。

今後の検討すべき点としては、述部・接続部に現れる形式名詞（モンチャキニなど）や、準体助詞に相当する機能をもつ「ノガ」などの表現がある。また、高知県方言で準体助詞としてガが選択された背景についても今後の課題である。

〈使用資料〉（略称は下線部） ①横田達雄（編）（2001）『武市瑞山獄中書簡一妻及び姉・妹あて― 改訂版』。②国立国語研究所（1968）『方言録音資料シリーズ』5。③国立国語研究所（1979-1987）『国立国語研究所資料集 10 方言談話資料（2）（8）（9）（10）』秀英出版。④国立国語研究所（編）『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本_のふるさとことば集成』国書刊行会。（国立国語研究所編「日本語諸方言コーパス(COJADS)モニター公開版」所収データ（データバージョン 2020.09）を使用） ⑤東京外国語大学風間ゼミ「東京外国語大学記述言語学論集『思言』」（<http://www.tufts.ac.jp/ts/personal/kazama/DialectMaterials.html>）内「高知県三代談話」「高知県（2017）談話」（2020.12.1 参照）。（前者を外大16、後者を外大17とする） ⑥安岡浩二（2003）『高知県方言における推量表現―ローとニカーランについて―』（高知大学大学院修士論文）。⑦令和3年収録の談話 ○国立国語研究所（1989～）『方言文法全国地図』。（本文中の表記について）用例は読みやすさの観点から発音に関する表記をカナ表記に置き換えた。〔共通語訳〕は基本的に元資料により、用例・訳文ともにゼロ準体の場合のみ「〇」を加えた。文脈の補足は筆者による。地域名は発話者が言語形成期を過ごした地域もしくは出身地である。また、安岡（2003）の録音当時（2000年）に30～40代であるとみられた話者（1950年代から1960年代生まれ）は一括して1950年代生まれとして扱う。

〈参考文献〉 青木博史（2016）『日本語歴史統語論序説』ひつじ書房。上野智子（1993）「高知市および周辺域方言の準体助詞「ガ」」『国語と教育』17, pp.9-16。上野智子（2018）『武市瑞山獄中書簡 妻及び姉・妹あて』の中の高知方言『高知人文社会科学研究』5, pp.1-26。久保蘭愛（2022 予定）「鹿児島方言史における準体助詞の発達」『中部日本・日本語学論集』和泉書院。坂井美日（2015）「上方語における準体の歴史的変化」『日本語の研究』11（3）, pp.32-50。坂井美日（2019a）「上方語と江戸語の準体の変化―2つの変化の相違点と共通点―」金澤裕之・矢島正浩（編）『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院, pp.228-251。坂井美日（2019b）「南琉球宮古語における準体の変化に関する考察」『方言の研究』5, pp.213-238。佐藤順彦（2009）「前期上方語のノデアロウ・モノデアロウ・デアロウ」『日本語文法』9（1）, pp.20-36。佐藤順彦（2011）「後期上方語におけるノデアロウの発達」『日本語文法』11（1）, pp.3-19。信太知子（1970）「断定の助動詞の活用語承接について―連体形準体法の消滅を背景として―」『国語学』82, pp.29-41。田野村忠温（1990）『現代日本語の文法1 「のだ」の意味と用法』和泉書院。土屋信一（2009）『江戸・東京語研究―共通語への道』勉誠出版。鶴橋俊宏（2013）『近世語推量表現の研究』清文堂。野田春美（1997）『「のだ」の機能』くろしお出版。野間純平（2013）「高知県四万十市西土佐方言における準体助詞」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp.5-14。原口裕（1978）「連体形準体法の実態―近世後期資料の場合―」春日和男教授退官記念語文論叢刊行会（編）『春日和男教授退官記念 語文論叢』桜楓社, pp.431-450。原口裕（1971）「「ノデ」の定着」『静岡女子大学研究紀要』4, pp.31-43。彦坂佳宣（2006）「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』2（4）, pp.61-75。諸星美智直（2004）『近世武家言葉の研究』清文堂。柳田征司（1993）「無名詞体言句から準体助詞体言句（「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」）への変化」『愛媛大学教育学部紀要 2 人文・社会科学』25（2）, pp.11-36。吉川泰雄（1950）「形式名詞「の」の成立」『日本文学教室』3, pp.29-38。